

## ベンガル語の示差的受領者項標示\*

石川さくら（東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1） sakura.ishikawa.di2@gmail.com

## 1. 導入

示差的項標示 (differential argument marking; DAM) は世界の多くの言語で観察され、近年注目を集めている分野である (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018 など)。本稿はコーパスを用いベンガル語 (印欧語族、インド・イラン語派) の示差的受領者項標示 (differential recipient marking; DRM) を調査し分析する。

Bhattacharya & Simpson (2007) によると、ベンガル語の複他動詞構文における受領者 (R) は R 項に生起する名詞の有生性によって標示が交替する。

- (1) ami            mini-ke        mɔʃla        di-l-am  
 1.SG.NOM   Mini-DAT    spice        give-PST-1  
 「私はミニに香辛料を与えた (あげた)。」        (作例)

- (2) ami            ɔal-e            mɔʃla        di-l-am  
 1.SG.NOM   bean-LOC    spice        give-PST-1  
 「私は豆カレーに香辛料を与えた (入れた)。」        (作例)

動詞 de ‘give’ が用いられる時、上記の (1) のように R が人間ミニの場合は与格・対格 -ke で標示されるが、上記の (2) のように R が無生物 ɔal ‘beans’ の場合は所格 -(t)e<sup>1</sup>で標示されている。このように R に生起する名詞の有生性によって R の標示が変わる。なお、以降、与格・対格 -ke をまとめて与格と呼ぶ (cf. Chatterji 1926; Malchukov, Haspelmath & Comrie 2010: 52)。

しかしながら、ここには2つの問題が見られる。まず1つに、無生物 R が与格標示を受ける例も観察される。オンライン記事から引用した以下の例 (3) を参照されたい。

- (3) profno    kɔr-a-ʃa-ke            k<sup>h</sup>ub        gurutto        de-e  
 question do-PTCP-CLF-DAT    very        importance    give-3  
 「質問することに非常に重要性を置く。」        (Kishor Alo, “কীভাবে একজন তুখোড় ছাত্র হওয়া যাবে”)

上記の (3) では R が無生物の「質問すること」にもかかわらず、所格ではなく与格標示になっている。

2つ目に、どのような R がどの標示を受けるのかについて、これまで量的に検証されていない。無生物 R の標示が場合によって与格と所格で交替するなら、コーパスを用いて実証的に分析することが効果的である。

これらの点を踏まえ、本稿はベンガル語の DRM についてコーパスを用いて調査することで、どのような特徴と分布があるのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. ベンガル語の P, T, R の項標示

本節では、先行研究に基づいてベンガル語の P (patient)、T (theme)、R (recipient) の項標示について前提知識を提示する。それらをまとめたものが以下の表 1 である。

\* 本稿の作成にあたって、以下の方々から有益なコメントをいただいた: 佐近優太、佐藤詠子、周杜海、末岡あり、鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、林真衣、古川智康、吉田樹生 (敬称略、五十音順)。各氏に深く感謝を述べたい。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも発表者の責任である。また、本研究は JSPS 科研費 JP24KJ0929 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> 所格が付与される名詞が閉音節の場合は -e で、開音節の場合は -e または -te になる。

表 1 ベンガル語の複他動詞構文における格標示

	P	T	R
有生物	与格 (特定)・ 無標 (不特定)	与格 (定/特定)・ 無標 (不定/不特定)	与格
無生物	無標	無標	所格・ 与格

まず、以下の (4) のように P は特定の有生物の場合に与格で標示される (Bhattacharya & Simpson 2007:2; Thompson 2010: 574)。 (5) で示すようにそれ以外の P は無標になる。

(4) ami            **æk-jon**            **nars-ke**            k<sup>h</sup>ũj-tʃ<sup>h</sup>-i  
 I.SG.NOM    one-CLF.HUMAN    nurse-DAT            search-PROG-1  
 「私は一人の看護師を探している (彼女の名前はミニ・シン)。」 (Bhattacharya & Simpson 2007:2)

(5) ami            **æk-jon**            **nars**            k<sup>h</sup>ũj-tʃ<sup>h</sup>-i  
 I.SG.NOM    one-CLF.HUMAN    nurse            search-PROG-1  
 「私は看護師を一人探している (誰でも可)。」 (Bhattacharya & Simpson 2007: 2)

T も P と似た振る舞いをする。以下の (6) で示すように T は定または特定の有生物の場合に与格で標示される (Bhattacharya & Simpson 2007: 3)。その場合でも動詞の直前なら与格は脱落しやすい (Bhattacharya & Simpson 2007: 3)。以下の (7) のように定ないし特定の有生物以外の T は無標になる。

(6) ami            mini-ke            **beṛal-ʃa(-ke)**            di-l-am  
 I.SG.NOM    Mini-DAT            cat-CLF-DAT            give-PST-1  
 「私はミニに猫をあげた。」 (Bhattacharya & Simpson 2007: 3)

(7) ami            paṭ<sup>h</sup>agar-e            **æk-ʃa**            **boi**            paṭ<sup>h</sup>a-l-am  
 I.SG.NOM    library-LOC            one-CLF            book            send-PST-1  
 「私は図書館に本一冊を送った。」 (Bhattacharya & Simpson 2007: 3)

R は人間や動物といった有生物であれば与格で、無生物なら所格で標示される (Bhattacharya & Simpson 2007:3)。それぞれ (1) と (2) を参照されたい。しかしながら、上記の (3) に観察されるように、無生物 R が所格だけではなく与格で標示される場合がある。

P, T, R の標示の共通点として、人称代名詞の場合には義務的に与格を用いることが挙げられる。また、人称代名詞に限らず、有生複数の場合、属格の有生複数接辞 -der、またはそれに与格標示 -ke が付加された -der-ke が用いられる。以下の (8) では R が複数の人間で、属格の有生複数接辞 -der のみで表示されている。

(8) amra            **b<sup>h</sup>ikk<sup>h</sup>uk-der**            b<sup>h</sup>ikk<sup>h</sup>a            de-i  
 I.PL.NOM    beggar-PL.GEN            alms            give-1  
 「私たちは物乞いたちに施し物を与える。」 (Thompson 2010: 572)

以上のように、与格は複他動詞構文の参与者 T と R の両方の標示に用いられるが、T の与格標示と R の与格標示に際して異なる点がある。1 つ目に、有生物 T では定性や特定性により与格と無標が交替するが、有生物 R ではそのような性質に依らず与格の標示を受ける (Bhattacharya & Simpson 2007: 3)。2 つ目に、どの語

順で生起しても T は人称代名詞の場合を除いて与格の標示が義務的でないが、R は義務的である (Bhattacharya & Simpson 2007: 4)。

以上の点を踏まえて、本稿はベンガル語の R 標示について分析を行う。

### 3. 方法

コーパス調査には Leipzig Collection (Goldhahn, Eckart & Quasthoff 2012) のベンガル語ニュース記事コーパス `ben_newscrawl_2017_1M` を利用した。R に無生物と有生物のいずれも取りうる動詞 `de 'give'` を用いた複他動詞構文 (GIVE 構文) を調査の対象とする。コーパスからこの動詞が定形として用いられている文を無作為に 2,000 件抽出し、各文で R の標示を確認し、アノテーションを施した。なお、上記の (8) のように、属格の有生複数接辞 `-der` のみで有生複数の R が表されている例は場合によって受領者と所有者の判定が困難であるため対象から排除した。

R の標示に影響を与えうる変数として、*extended animacy hierarchy* (Croft 2002: 130; (9) を参照) に沿った項目である人称 (1・2 人称、3 人称)、指示性 (代名詞、固有名詞、普通名詞)、有生性 (有生、無生)、人間性 (人間、非人間) と T の標示 (与格、無標) をアノテーションに加えた。

#### (9) *Extended animacy hierarchy* (Croft 2002: 130)

1・2 人称代名詞 < 3 人称代名詞 < 固有名 < 人間普通名詞 < 非人間有生普通名詞 < 無生普通名詞

類型論的な観点からも *extended animacy hierarchy* に沿ったこれらの変数は DAM に影響を与えるとされている (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 5)。ベンガル語の DRM には有生と無生の対立だけが考えられてきたが、*extended animacy hierarchy* に沿って検討することでより詳細な分布を明らかにできる。また T の標示を変数に加えることで、T の標示と R の標示の相互作用の観察が可能になる。節内の項標示の相互作用も DAM の要因に寄与することが知られている (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 12)。

アノテーションの結果、コーパスから抽出したデータ 2,000 件のうち、1,625 件が有効なデータであった。そのうち節内に R が明示され、与格または所格で標示されるデータを 647 件得た。なお、本調査では人間以外の有生物を R として持つデータが 1 件しか得られなかったため、有生性の対立ではなく人間・非人間の対立でまとめる。

### 4. 結果

得られたデータの調査結果をまとめたものが以下の表 2 と表 3 である。表 2 は *extended animacy hierarchy* の項目に沿った R 標示を、表 3 は T 標示ごとの R 標示の結果を表す。

まず表 2 を見ていく。人間の R のうち 234 件 (99.2%) が与格標示で、2 件 (0.8%) のみが所格標示を受けた。一方、非人間の R のうち 80 件 (19.5%) が与格標示で、331 件 (80.5%) が所格標示を受けた。このことから、おおむね R が人間であれば与格標示、非人間であれば所格標示という傾向が見てとれる。この結果は 1-2 節で見たベンガル語の先行研究の観察と合致する。また、複他動詞構文の交替において有生性が要因になるということは他の言語でも分析されており (Bresnan et al. 2007; Haspelmath 2007 など)、ベンガル語もそれに沿ったデータを提供していると言える。それと同時に、興味深いことに非人間 R に対して 19.5% も与格で標示されるという結果が得られた。この結果は先行研究が述べる有生性による格標示の交替では予測できない。非人間 R が与格標示を取りうることに加え、その割合が約 20% にも及ぶということがコーパス調査によって初めて明らかになった。

表 2 Extended animacy hierarchy の項目ごと R 標示の結果

		R					
		与格		所格		合計	
		N	%	N	%	N	%
人間	1/2人称代名詞	31	93.9%	2	6.1%	33	100.0%
	3人称代名詞	59	100.0%	0	0.0%	59	100.0%
	固有人名	49	100.0%	0	0.0%	49	100.0%
	普通名詞	95	100.0%	0	0.0%	95	100.0%
	合計	234	99.2%	2	0.8%	236	100.0%
非人間	指示代名詞	1	10.0%	9	90.0%	10	100.0%
	固有名詞	30	46.9%	34	53.1%	64	100.0%
	普通名詞	49	14.5%	288	85.5%	337	100.0%
	合計	80	19.5%	331	80.5%	411	100.0%
合計		314	48.53%	333	51.47%	647	100.0%

表 3 T 標示ごとの R 標示の結果

		R					
		与格		所格		合計	
		N	%	N	%	N	%
T	無標	314	49.1%	326	50.9%	640	100.0%
	与格	0	0.0%	3	100.0%	3	100.0%
	明示なし	0	0.0%	4	100.0%	4	100.0%
	合計	314	48.5%	333	51.5%	647	100.0%

次に、人間性に加え、人称と指示性に沿って見ていく。R が人間の場合、1 人称・2 人称の所格標示が 2 件観察されたが、それ以外の大半の場合は与格標示だった。R が非人間の指示詞の場合、合計 10 件中、与格標示は 1 件 (10%) だった。さらに、R が非人間の固有名詞だと 30 件 (46.9%) が与格標示で 34 件が所格標示 (53.1%) であった。比較的、与格標示が高い割合を示す。普通名詞の場合、337 件中 49 件 (14.5%) が与格で標示され、288 件 (85.5%) は所格で標示された。

続いて、表 3 から、T の標示と R の標示に連関はないことが分かる。全 647 件中、T が明示されたデータは 643 件あり、そのうち 640 件が無標で現れた。T が無標で現れた時に、R は与格標示が 314 件 (49.1%)、所格標示が 326 件 (50.9%) とほとんど同じ割合を示している。T は 3 件のみが与格で標示されたが、その際、R は全て所格標示だった。T の標示によって R 標示が交替しているわけではないという点で、T の標示が R の標示の選択に影響を与えているとは言い難い。

結果として、ほとんどの場合、R が人間か否かで R 標示が分かれるものの、非人間 R が一定数、与格標示を受けることが観察された。そして非人間 R の指示性により格標示の交替のしやすさに差がある。また、T の標示は R の標示に影響を与えていないということが調査より明らかになった。

## 5. ベンガル語の DRM の特徴

本節では、コーパス調査の結果に基づき、ベンガル語の DRM の特徴について 3 つのことを論じる。

### 5.1 ベンガル語の DRM の階層

まず、R が有生か無生かという二項対立ではなく、extended animacy hierarchy に沿った方がベンガル語の DRM の傾向を把握できる。以下の (10) では extended animacy hierarchy を再掲する。

## (10) Extended animacy hierarchy (Croft 2002: 130)

1・2 人称代名詞 < 3 人称代名詞 < 固有名 < 人間普通名詞 < 非人間有生普通名詞 < 無生普通名詞

階層の左側に行くほど与格標示を、階層の右側に行くほど所格標示を受けやすくなる。人間普通名詞までは原則与格で標示されていたものの、それより右側の項目では所格標示が優勢になる。さらに、非人間名詞は extended animacy hierarchy の指示性の階層（代名詞 < 固有名 < 普通名詞）(Croft 2002: 130) に沿った分布を見せる。非人間固有名詞では約半分の割合で標示が交替し、非人間普通名詞ではその割合が逆転して所格標示が上回る。つまり、ベンガル語の DRM は有生性に加え、人称と指示性を含めた extended animacy hierarchy に沿った振る舞いを見せる。

### 5.2 ベンガル語の DRM の義務性

これまでベンガル語の DRM は有生性に依るとされてきた。このように格標示が名詞句の固有の性質に依り義務的になされるものを分裂 (split) システムという (De Hoop & Malchukov 2007)。反対に、語用論や文脈などによって格標示が交替するものを流動 (fluid) システムという (De Hoop & Malchukov 2007)。

確かにベンガル語の DRM は、R が人間である場合は与格標示を受けるという点で人間性にしがった分裂システムを持つ。一方、R が非人間の場合、与格と所格の標示が交替する点で流動システムの特徴を有する。つまり、ベンガル語の DRM は 2 つのシステムが共存する分裂・流動 (split-fluid) システム (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 28) である。この DAM における分裂・流動システムは通言語的によく観察される。例えば、カナダ語 (ドラヴィダ語族) の示差的目的語標示 (differential object marking; DOM) は有生性にしがった分裂システムを持つが、目的語が無生物の場合は特定性によって有標・無標で交替する (Lidz 2006)。類似した現象はスペイン語の DOM でも観察されている (Weissenrieder 1991; Delbecque 2002; García García 2007)。本稿のベンガル語の分析は DRM の分裂・流動システムのデータを提供している。

### 5.3 ベンガル語の DRM の機能

一般的に DAM、特に格標示の機能として弁別 (distinguishing) 機能と同定 (identifying) 機能の 2 つが挙げられる。前者は節内の項を区別するための機能を指す (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 30)。後者は項が動詞に対して持つ意味的な関係性を標示する機能で、節内の他の項からは独立して標示を取る (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 30)。

本調査の結果は、ベンガル語の DRM は同定機能を持つことを示唆する。表 3 で判明したように、節内に共起する T の標示は R の標示に影響を及ぼさない。仮に DRM が弁別機能を持つなら、T の標示が一定であれば R の標示が交替する必要はない。しかしながら、本調査では T はほとんどの場合無標で、T が無標であるにもかかわらず、節内の R の標示は与格と所格で約半分に割れた。このことは、ベンガル語の DRM は項が動詞に対して持つ意味的な特徴を示すための同定機能を持つことを示唆する<sup>2</sup>。この結果は、DRM には同定機能があるという Kittilä (2008) の通言語的な分析を支持する。

## 6. 結論

本稿はコーパスを用いてベンガル語の DRM を調査し、ベンガル語の DRM の特徴を分析した。その結果、ベンガル語の DRM は人間性による分裂システムに加え、非人間 R の場合に流動システムを持つことが明らか

<sup>2</sup> ここで、同定機能として何を同定しているのかが問題になる。無生物 R が与格標示を受けると例を分析すると、GIVE 構文における R の与格標示は、GIVE 事象としての典型性 (Shibatani 1996) と受影性 (Næss 2004; Kittilä 2008) の高さを同定していると考えている。しかし、紙幅の都合上、ここでの議論を控える。

かになった。そしてそれは *extended animacy hierarchy* に基づいた階層にしたがった傾向を持つ。さらに、ベンガル語の DRM は節内の項を区別するための弁別機能ではなく、項が動詞に対して持つ意味的な特徴を示すための同定機能として働いている。このように、本稿はコーパスを用いた実証的な方法でベンガル語の DRM を調査し、ベンガル語の DRM の特徴と分布を分析した。また、類型論的な観点での分析を通し DRM が持ちうる機能やシステムを明らかにすることで、通言語的な DAM 研究に貢献する。

## 略号一覧

1: 1 <sup>st</sup> person	GEN: genitive	NOM: nominative	PST: past	HUMAN: human
3: 3 <sup>rd</sup> person	DAT: dative	PL: plural	PTCP: participle	
CLF: classifier	LOC: locative	PROG: progressive	SG: singular	

## 参考文献

- Bhattacharya, Tanmoy & Andrew Simpson. 2007. Double object and ditransitive constructions in Bangla/Bengali. *Handout presented at Conference on Ditransitive Constructions*.
- Bresnan, Joan, Anna Cueni, Tatiana Nikitina & Harald Baayen. 2007. Predicting the dative alternation. In G. Bouma, I. Krämer & J. Zwarts (eds.), *Cognitive foundations of interpretation*, 69–94. Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences.
- Chatterji, Suniti Kumar. 1926. *The origin and development of the Bengali language Part 2*. Calcutta: Calcutta University Press.
- Croft, William. 2002. *Typology and universals*. 2nd ed. Cambridge University Press.
- De Hoop, Helen & Andrej Malchukov. 2007. On fluid differential case marking: A bidirectional OT approach. *Lingua* 117(9). 1636–1656.
- Delbecque, Nicole. 2002. A construction grammar approach to transitivity in Spanish. In Kristin Davidse & Béatrice Lamiroy (eds.), *The Nominative & Accusative and their counterparts*, 81–130. Amsterdam: John Benjamins.
- García García, Marco. 2007. Differential Object Marking with inanimate objects. *Proceedings of the workshop “Definiteness, specificity and animacy in Ibero-Romance Languages”* 122. 63–84.
- Goldhahn, Dirk, Thomas Eckart & Uwe Quasthoff. 2012. Building large monolingual dictionaries at the Leipzig Corpora Collection: From 100 to 200 languages. *Proceedings of the 8th international language resources and evaluation*. 759–765.
- Haspelmath, Martin. 2007. Ditransitive alignment splits and inverse alignment. *Functions of language*. 14(1). 79–102.
- Kittilä, Seppo. 2008. Animacy effects on differential Goal marking. *Linguistic Typology* 12(2). 245–268.
- Lidz, Jeffrey. 2006. The grammar of accusative case in Kannada. *Language* 82(1). 10–32.
- Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath & Bernard Comrie. 2010. Ditransitive constructions: A typological overview. In Andrej Malchukov, Martin Haspelmath & Bernard Comrie (eds.), *Studies in ditransitive constructions*, 1–64. De Gruyter Mouton.
- Shibatani, Masayoshi. 1996. Applicatives and benefactives: A cognitive account. In Masayoshi Shibatani & Sandra A. Thompson (eds.), *Grammatical constructions: Their form and meaning*. Oxford: Oxford University Press.
- Thompson, Hanne-Ruth. 2010. *Bengali: A comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Weissenrieder, Maureen. 1991. A functional approach to the accusative a. *Hispania*. American Association of Teachers of Spanish and Portuguese 74(1). 146–156.
- Witzlack-Makarevich, Alena & Ilja A. Seržant. 2018. Differential argument marking: Patterns of variation. In Ilja A. Seržant & Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of differential argument marking*, 1–40. Berlin: Language Science Press.